

ゲオルギオス・スフランヅィス『回顧録(小年代記)』に於ける引用句に関する考察
平野智洋（女子美術大学）

本報告はゲオルギオス・スフランヅィス(Georgios Sphrantzis- Γεώργιος Σφραντζής, 1401-77/78?)の著作『回顧録(小年代記)』註解の一環として、著作に於ける引用句を分析し、ビザンツ文学史上に於けるスフランヅィスの位置づけを試みる事を目的としている。

『回顧録』の成立と原史料については既に多くの研究があり、特に校訂者の一人 V. グレク(V. Grecu 1964, 1965)によって、著作の主要史料が著者自身の日記帳であり、その叙述内容が著者自身の経験・見聞に依拠する同時代史として、際だった独自性を持つものである事が示されている。他方、英訳者 M. フィリピディス(M. Philippides, 1980)は、『回顧録』に於ける、先行する歴史書の引用の不在と、聖書の引用ですら少数に留まるという特徴と共に、引用句としては諺への傾倒が見られる点を指摘している。これらの分析は、ビザンツ文学史上に於けるスフランヅィスの、特異かつやや孤立した地位を想起させている。

この様な『回顧録』著作及びその研究状況を踏まえ、本報告では改めてスフランヅィス著作に於ける引用句を、著者が好んだとされる諺を中心に抽出し、その出典や引用の状況について検証する。諺は口伝の性質も持っており、その引用・言及が必ずしも書物としての諺集・箴言集への参照・引用を意味するとはいえない。しかしスフランヅィス自身が記すコンスタンディノス 11 世帝(Konstantinos XI Palaiologos, r. 1449-53)の発言(Sphrantzis, Chap. XXXII. 7)からは、スフランヅィスが、単純に日常的な使用を超えて深く諺への探求、即ち諺集の参照や様々な文学作品に於ける引用例の分析に及んでいた事が示される。従って、スフランヅィスが引用を通じて、2 世紀のゼノビオス(Zenobios)に始まり、同時代の人文主義者ミハイル・アポストリス(Michail Apostolis)にいたるまで、数多くの諺集編者との接点を有していた事が認められる。特に、同時代人であるアポストリスとの知的交流には枢機卿ヴィサリオン(Vissarion)の介在も想起され、スフランヅィスを同時代、とりわけモレアス専制公領首府ミストラスに於ける文化活動との関連に於いて位置づける上で、重要な手がかりになるものと思われる。